vinetur

Castel Groupをめぐる一族の対立、国境を越えた法廷闘争に発展

Le Mondeによると、Romy Castelはワイン・ビール事業帝国の支配権をめぐり、フランスからシンガポールまで親族と法廷で争っている

2026年11月22日（日）



Castel Groupの支配権をめぐる一族間の対立と法廷闘争が、フランス有数のワイン企業であり大手ビール企業でもある同グループを揺るがしている。長年、ほとんど表立った動きのなかったグループ内部で、異例の公然たる争いが始まった。

Le Mondeによると、対立は約1年前から深まり、フランス、スイス、ルクセンブルク、シンガポールへと広がっている。同紙は、Pierre Castelが創業した企業の内部で、訴訟や個人攻撃、弁護士やアドバイザーの介入、対立する広報活動が相次ぎ、グループが異なる方向へ引き寄せられる異例に激しい争いが起きていると伝えた。

争いの焦点は、Pierre Castelが数十年かけて築いた事業帝国の支配権だ。Le Mondeによると、法廷闘争では、唯一の娘であるRomy　Castelと、ワイン事業を担う一族側の複数のいとこが、DF Holdingのトップと対立している。報道では、裁判所で争われているすべての主張が詳述されてはいないが、関係する法域の広さは、単なる家族間の不和をはるかに超える争いであることを示している。

対立は、一族をめぐる印象的な背景のもとで進んでいる。10月17日、ポルトガル南部にあるPierre Castelの自宅に少人数が集まり、100歳の誕生日を祝った。Le　Mondeによると、出席者は約20人で、Romy Castelのほか、親族の一員である甥のAlain CastelとPhilippe Castelも参加した。風船や誕生日ケーキが用意され、「Pierre Castel, 100 years」と刻まれた樽もあった。

52歳のRomy Castelは10月下旬、Le Mondeの取材に応じるという異例の機会を得て、誕生日の集まりは父親にとって感慨深いものだったと語った。父親は現在、事業の第一線を退いているが、グループの関係者は今も父親に深く感謝しているという。祝いの席で父親は涙を流したが、彼女はそれを「よい意味で」と表現した。

この私的な光景は、いまグループを取り巻く争いと鮮やかな対照をなす。Le Mondeは、Castelに詳しい関係者の話として、双方が声明と反論を繰り返すため、銀行関係者でさえ誰を信頼すべきか分からなくなっていると伝えた。同じ関係者は、対立する二つの陣営は別々の惑星に暮らしているようだと述べ、争いがいかに深刻化しているかを示した。

グループ内部の緊張は、一族の枠を大きく超える影響力を持つ。Castelはワイン・ビール業界で大きな存在感を占めており、長期化するガバナンスをめぐる対立は、飲料事業全体の戦略や投資判断に影響する可能性がある。意思決定が遅れたり、法廷闘争が続くなかで外部の取引先が慎重になったりすれば、ブランドや流通網、サプライヤーにも影響が及びかねない。

同社の事業規模を考えると、この不透明感は飲料業界にとってとりわけ重要だ。ワインではCastelは長年、フランスで支配的な地位を占めてきた。ビール事業でも大きな権益を持つ。この規模の企業で支配権をめぐる争いが起きれば、資本配分や事業拡大計画の進め方、フランス国内外の取引先との関係に対する経営陣の対応にも影響しうる。

Le Mondeは、グループの最高経営責任者としてGregory Clercの名を挙げた。所有権をめぐる争いが続く一方で、日々の経営を必要とする事業会社を舞台に対立が起きていることがうかがえる。同紙は通常の商業活動が停止したとは伝えていないが、影響力を持つ複数の勢力の対立によって、企業への圧力が強まっていると描いている。

Pierre Castelの個人的な立場も、この局面を一層繊細なものにしている。Le Mondeは、彼が疲れた様子でポルトガルで引退生活を送り、生涯にわたって強権的な手腕でグループを率いてきたと伝えた。創業者の権威を軸に築かれた同族企業では、とりわけ創業者の存在感が弱まると、長年抑え込まれてきた緊張が表面化することがある。Castelはいま、そうした移行期に直面し、その様子が広く公の目にさらされているようだ。

この事案が異例なのは、争いの場となっている国や地域の多さでもある。欧州とアジアにまたがる訴訟や紛争は、和解を難しくし、法的費用を増大させ、経営陣や取引先の不透明感を長引かせる可能性がある。11月22日時点で、入手可能な情報からは公表された解決策は確認できていない。